

帝国の終焉

— スパルタ帝国の解体の最終プロセス — (二)

中 井 義 明

はじめに (『社会科学』七十二号)

一 研究史

二 前三七一年から前三七〇年にかけての事件と動向

1. 前三七一年の事件と動向

2. 前三七〇年の動き

(1) 前三七〇年春：中部ギリシアにおける新しい事態

(2) 前三七〇年夏：マンティネイアの政変とアルカディア連合の結成

(3) 前三七〇年冬：ボイオーティア軍の第一次ペロポネソス侵攻

三 前三六九年の事件

1. 前三六九年初夏：夏季に備えての両陣営の準備

2. 前三六九年夏：ボイオーティア軍の第二次侵攻

3. 前三六九年秋：メガレポリスの建設

4. 前三六九／三六八年冬：アルカディア連合とエーリスの確執

四 前三六八年の事件

1. 前三六八年春：デルポイでの平和会議

2. 前三六八年夏：泣かない戦い

五 前三六七年の事件

1. 前三六七年春：アテーナイとスパルタの外交活動

2. 前三六七年夏：テーバイの遠征活動

3. 前三六七年秋：ペルシアでの平和会議

六 前三六六年の事件 (以下本号)

1. 前三六六年春：テーバイとシキュオンの政変

2. スーサ及びテーバイにおける平和会議

3. 前三六六年夏：プレイウスの攻防

4. シキュオンを巡る問題

5. 同盟の解体

七 外交と党派の分析

1. スパルタ
2. ペロポネソス同盟諸国 (以下次次号)
3. アルゴス
4. アテーナイ
5. ボイオーティア

結 論

六 前三六六年の事件

1. 前三六六年春：テーバイとシキュオンの政変

前三六七年暮れか翌年の初春、アルカディア人とテーバイの反エパメイノンダス派の人々 *hoi antistasiotai* はエパメイノンダスを弾劾する運動を展開した。彼らはエパメイノンダスがスパルタの利益となるようにアカイアを処理したと非難したのである¹。

その結果、エパメイノンダスの指導力は低下し、反エパメイノンダス派が民衆の間で力を持つようになった。テーバイはエパメイノンダスの処置を撤回している。ハルモステスがアカイアへ派遣され、地元の大衆 *ho plethos* の協力を得て政権を掌握していた「貴人 *hoi beltistoi*」や「有力者 *hoi kratistoi*」を追放し、寡頭制を廃止している²。

追放された寡頭派は少数でなかった。彼らは直ちに結集し、それぞれの都市に向かって兵を進め帰国を果たしている³。アカイアの諸都市は国制を寡頭制に戻し、アルカディア人に対する敵意からスパルタとの同盟に復帰したのである⁴。

アカイアにおける一連の政変はペロポネソス北部地域の緊張を高めることとなった。かつて親スパルタ派の指導者であったエウプロンはこのような状況を利用してシキュオンの指導権を掌握しようとしたのである⁵。

彼は、寡頭派への不信を強めていたアルゴスとアルカディア連合に対し、「最も富裕な人々 *hoi plousiotatoi*」が政権を担当している限り彼らがスパルタに寝返る危険性がある、と申し立てている。そして自分はスパルタの「不遜 *to phronema*」を耐えがたいと思っており「奴隷状態 *douleia*」を脱したことを喜んでいるのだから、自分こそ「民衆 *ho demos*」の指導者に相応しく、自分の「忠誠心 *pistis*」をアルカディアとアルゴス両国に捧げ、両国との関係を確実なものにしていくのだ、と述べている。この言葉を受けてアルカディアとアルゴスはエウプロンへの支援を約束したのである⁶。

エウプロンはアルゴス人とアルカディア人の臨席の下に民会を召集し、国制は「平等

isos」と「等質 homoios」に基づくとして寡頭制の廃止と民主制の成立を宣言したのである。民会はエウプロンを含む五名の人物を将軍に選出し、エウプロンは傭兵隊長のリュシメネスを解任して息子のアデアスを後任に任命している。その上でエウプロンは約四十名の「最も富裕な人々 hoi euprotatoi」を「スパルタ最良の廉で epi lakonismos」追放し、その財産を没収している⁷。彼は没収した財産や国庫、神殿の宝庫を利用して傭兵の待遇を改善し、その信頼を独占して傭兵隊の拡充に努めたのである。

2. スーサ及びテーバイにおける平和会議

その間、スーサでは各国の代表者たちがペルシアと交渉を進めていた。レウクトラの戦いとエパメイノンダスのラコニア侵攻はペルシア王に強い印象を与えていた⁸。

ペロピダスは、テーバイがペルシアとの関係でスパルタやアテーナイのように過去において汚点を持たないこと、過去一貫して親ペルシアであったこと、独力でスパルタと戦ったアルゴスとアルカディアが大敗を喫してしまったことを列挙して、テーバイの忠誠心と力を誇示したのである⁹。アテーナイのティマゴラスはペロピダスの発言を支持している。そこでペルシア王はペロピダスを、次いでティマゴラスを厚遇し¹⁰、スパルタの使節を全く無視したのである¹¹。スパルタは前の年にアルカディア人相手に獲得した勝利を背景にペルシア王から傭兵を雇い入れる資金を引き出そうとエウテュクレスを派遣していたが成功しなかった¹²。

ペルシアはテーバイをコイナー＝エイレーネーの保障国と位置付け、ペロピダスに平和条約案を諮問したのである¹³。ペロピダスはメッセニアの独立、トリピュリアやアクロレイア、ピサティスのエーリス帰属、各国の自治権の保障、作戦行動中のアテーナイ艦隊の引き上げ、平和条約に従おうとしない国に対する懲罰遠征軍派遣の義務を提案している¹⁴。アテーナイのレオンの不満に応じて、ペルシア王はペロピダスの案より正しい平和条約案があればアテーナイは大王に知らせること、という条項を追加している。

使節の帰国後、アテーナイではティマゴラスが背信行為の廉で処刑されている¹⁵。アルカディアでは使節のアンティオコスが万人会で不満の意を表明し、ペルシアの柔弱さとその富が見掛け倒しに過ぎないことを報告している¹⁶。逆にエーリスではアルキダーモスが大王の行為を称賛している。

テーバイにおいて開かれた平和会議の席上で、文書を携行してきたペルシアの使節は王の印章を示しながら、各国の使節に対して大王とテーバイに友好的であろうとする国が平和条約の遵守を誓約するようテーバイは命ずることという大王の命令を読み上げた。テーバイが各国の使節に誓約を迫った時、会議に出席していた使節たちは平和条約を聞くために派遣されたのであって、誓約するために派遣されたのではない、と拒否したのである。

加えて、アルカディア人のリュコメデスはテーバイでの平和会議の必要性を否定している。リュコメデスに悪感情を抱いていたテーバイは、彼が同盟条約を破壊したと非難したのである。リュコメデスと他のアルカディアの使節は会議場から退席してしまい、テーバイにおける平和会議は失敗に終わってしまった。

テーバイは個別交渉によって各国に平和条約を承認させようとした¹⁷。ペロポネソスでの最初の訪問国であるコリントスはコイナー＝エイレーネーを必要としないと拒否している。エーリスとメッセニアを除く他のペロポネソス諸国も同じように拒否し、平和条約による覇権獲得というテーバイの試みは失敗に終わった。

この頃、エウプロンは同僚を処刑したり追放したりして政治的競争者を排除し、シキュオンにおける単独の支配権を掌握していた¹⁸。権力基盤を強化するために彼は奴隷を解放し、市民権を付与して民衆層の育成に努めたのである。彼はこの政変が同盟諸国に承認されるために、同盟諸国の指導者たちに贈賄したり、同盟諸国の遠征に自ら傭兵を率いて参加したりしている。

3. 前三六六年夏：プレイウスの攻防

この頃、プレイウスは包囲下にあった¹⁹。アルゴスはプレイウス領内にある要衝トリカラノン要塞を要塞化し、プレイウス人亡命者を守備兵として配備したのである²⁰。シキュオンは国境のテュアミアの要塞化に着手していた²¹。コリントスとプレイウスの交通線は遮断されていた。敵の部隊が領内を巡回してプレイウス側の物資搬入を妨害していたのである²²。領土は破壊され、農作物の収穫は全く期待できず²³、生活必需品の欠乏は絶望的であった²⁴。にもかかわらずプレイウス人の戦意とスパルタとの連帯は堅持された。

シキュオンに駐在していたテーバイ人アルコンはプレイウスへの遠征を計画し、駐留部隊、シキュオン人及びペッレーネー人を動員したのである²⁵。エウプロンは二千名の傭兵を自ら率いて遠征に加わっている²⁶。

遠征軍はプレイウス領に侵攻し、トリカラノンを経由してヘーライオンへと向かった。そしてプレイウスからヘーライオンを経由してコリントスに通じる道を利用してプレイウス人が迂回することのないように、ヘーライオンにシキュオン人とペッレーネー人の部隊が警戒の任に就き、ポイオーティア人部隊とエウプロンの傭兵部隊は平野部に降りていったのである。

遠征軍の接近を知ったプレイウスは騎兵部隊と選抜部隊を差し向けて平野部への進出を阻止しようとした。日中の大部分、小競り合いが続いた。傭兵部隊は平野部にたどり着いたがそれ以上は前進できず、逆にプレイウス側の重装歩兵部隊の一部がヘーライオンとの交通線上に進出したために、遠征軍は撤退を余儀なくされた²⁷。

プレイウス人は撤退していく侵攻軍を少しの間追跡した後、矛先を転じ市壁の側面に沿ってヘーライオンに急行したのである²⁸。ボイオーティア人部隊もプレイウス人の意図を察知し、ヘーライオンへと急いだ²⁹。両軍の間に競争が生じ、先にヘーライオンに到達したのはプレイウス人であった。先ず騎兵部隊がペッレーネー人部隊に圧迫を加え、遅れて到着した重装歩兵部隊が再度の攻撃によって防衛側の戦列を突き崩すのに成功している。この戦いを見守っていたボイオーティア人とエウプロンの傭兵部隊は味方の敗北の後シキュオンへと立ち去っていった。

シキュオン人の損失は軽微であったが、ペッレーネー人の損失は大きかった³⁰。プレイウスはこの戦いでペッレーネー人のプロクセノスを捕虜としているが、身代金を取ることなく釈放している³¹。そしてその後まもなくペッレーネーはスパルタとの同盟に復帰した³²。

食糧事情が悪化していたプレイウスはコリントスに駐在していたアテーナイ人の将軍カレスに必需品の搬送を依頼した。カレスがプレイウスに到着すると、プレイウス人は婦女子と老人のペッレーネーへの避難を護衛するようにカレスに頼んでいる。彼らはペッレーネーに到着すると物資を購入し、非戦闘員を残して夜の間に出発した。途中巡察中の敵と遭遇したが、これを排除するのに成功し、無事プレイウスに帰着するのに成功した³³。

翌日、プレイウス人の騎兵と重装歩兵の中で最も有用な人々 *hoi te hippeis kai hoi chresimotatoi ton hopliton* がカレスにテュアミアの要塞奪取を持ちかけている³⁴。騎兵と重装歩兵の中で最強の者たち *hoi hippeis kai ton hopliton hoi erromenestatoi* が道案内すると約束したのである³⁵。カレスはプレイウス人の騎兵や重装歩兵、直属の傭兵部隊を率いて出発した³⁶。前進する速度は次第に速くなり最後には駆け足になっていった。

他方、要塞に居たシキュオン人は日没少し前だったため、水を浴びたり食事をしたり、パンをこねたり寝床の用意をしたりしていた。カレスとプレイウス人が急速に接近してくるのを見てシキュオン人は逃亡したのである³⁷。プレイウス人はテュアミアの要塞を占領し、コリントスに要塞奪取を知らせる使者を派遣している。コリントスはプレイウスへの穀物の搬送をはじめ、テュアミアの要塞工事が完成するまで続けた。

4. シキュオンを巡る問題

アルカディア連合はシキュオンに干渉し、エウプロンの僭主化を否定したのである³⁸。ステュンパロスのアイネイアスは部隊を率いてアクロポリスに登り、市内にいた「最も有力な人々 *hoi kratistoi*」や「法令抜きに追放された人々 *hoi aneu dogmatos ekpeptokotes*」を集めたのである。エウプロンは港に逃げ、コリントスに駐留していたラケダイモン人パシメロスと呼び寄せ、港をスパルタに引き渡したのである³⁹。そうして自分は常にスパルタに対しては忠実であったと言って、スパルタとの同盟に復帰している。

シキュオンでは、アルカディアの支援を受けた「最良の人々 hoi beltistoi」とエウプロンを支持する「民衆 ho demos」との間で内乱が生じた⁴⁰。

エウプロンはアテーナイに赴き、傭兵を雇い入れて戻って来た。彼は民衆の助けで市街地の支配権を回復し、敵対する人々はテーバイ人のハルモステスが保持していたアクロポリスに逃げ込んだのである。エウプロンは武力によってアクロポリスを奪取しようとしたが成功しなかった⁴¹。そこで彼は友好的な手段によってアクロポリスの返還と「最も有力な人々 hoi kratistoi」に対するテーバイの保護を解除させようと試みたのである⁴²。彼は再びスパルタとの同盟を破棄し、テーバイとの同盟に復帰している。

同年夏、アッティカ北東部のオロポスが反アテーナイ派の亡命者とエレクトリアの僭主テミソン及びテオドロスによって占領された⁴³。アテーナイはカレスを呼び戻し、総力を挙げてオロポス奪回を企てている。驚いたテミソンはオロポスの守備をテーバイに委ねたのである。アテーナイによる奪回の試みは失敗に終わったが、テーバイはオロポスの町をテミソンに返さなかった。

アテーナイでは支援に馳せつけてこなかったペロポネソスの同盟諸国に対する不満が高まっていた⁴⁴。アルカディア連合の指導者リュコメデスはこのような状況を利用してアテーナイとの同盟を一万人会で提案したのである⁴⁵。提案は承認され、リュコメデスはアテーナイに赴いて同盟の提案をしている。

リュコメデスの提案はアテーナイをジレンマに追い込んだ。アルカディアとの同盟は基本的には利益となる。しかしスパルタはアテーナイと同盟条約を結んでおり、友好国であった。そのアテーナイがスパルタの敵であるアルカディアの同盟国になるのである。反対意見はあった。しかし、アテーナイがアルカディアと同盟を結ぶことはアルカディアがテーバイに支援を求めなくなり、そのことがスパルタにとっても利益 agathon となると解釈して、リュコメデスの提案を受け入れたのである。

アテーナイからの帰途、リュコメデスはアルカディア人亡命者によって殺された⁴⁶。アテーナイはカッリストラトスを使節として派遣し、対抗してボイオーティアはエパメイノンダスを派遣している⁴⁷。エパメイノンダスはアルカディア連合とアテーナイとの同盟条約の成立を阻止することは出来なかったが、ボイオーティアとの同盟破棄を思いとどまらせるのには成功している。

エウプロンはテーバイの当局者を買収しようとした⁴⁸。彼は賄賂を携えてテーバイに赴き、敵対派もエウプロンの意図を察知して後を追った⁴⁹。彼らはエウプロンが当局者たちと親しく交渉しているのを見て、エウプロンがその目的を達してしまうのではないかと怖れ、その場でエウプロンを殺害したのである。

テーバイの当局者たちは殺害した者たちを評議会に告発した。当局者たちは事件の国際

的な反響を恐れたのである。殺害した者たちの行為が無情 *tolme* かつ残忍 *he miaria* であり、テーバイの国法と権威を冒しているとして告発したのである⁵⁰。被告は一人を除いて罪状を否認し、罪状を認めた被告は次のように弁論している⁵¹。

自分はテーバイの国法を無視したことを否定する。エウプロン殺害はアルキアスとヒュパテス派の人々に対するテーバイ民主派の行為を先例としている。神聖でない人間や裏切り者で僭主である人間は人類全体によって既に死刑の判決が下されている。従って、判決がなくとも可能な時に処刑できるのだ。神聖でないという理由としてエウプロンによる神殿宝庫の略奪をあげることができる⁵²。裏切り者であるという理由としてエウプロンは最初にスパルタを裏切ってテーバイにつき、次いでテーバイを裏切ってスパルタ側に組したことを指摘できる。僭主であるということの理由として奴隷を解放しただけでなく市民としたことと、「悪人 *hoi adikountes*」ではなく「最良の人々 *hoi beltistoi*」を処刑し、彼らを追放して財産を没収したことである。

加えてテーバイ最大の敵であるアテーナイの支援を得てポリスを奪回し、テーバイのハルモステスに対して武装したことが明らかにされている⁵³。エウプロンは買収によってテーバイを墮落させようとしたのである。従ってエウプロン殺害は正しいとされる。

一体ギリシアのどこに裏切り者や僭主たちと協定する者が居るのか⁵⁴。同盟条約は同盟国の亡命者が全同盟領域から法律の保護を奪われると規定している⁵⁵。同盟総会の決定なしに帰国した者を処刑するのは決して「不正 *ou dikaion*」ではない。従って、エウプロン殺害者を処断するのは利敵行為であり、エウプロン殺害を正当とするならそれは全同盟国による報復行為となる。

テーバイの評議会はエウプロン殺害を正当と判断したのである⁵⁶。しかしシキュオンの「大衆 *hoi pleistoi/hoi politai*」はエウプロンを「善人 *andros agathos*」と見なし、アゴラに埋葬して、「ポリスの創建者 *archegetes tes poleos*」として崇拜している⁵⁷。この後シキュオンはスパルタ側の防備の手薄に乗じて港を奪回した⁵⁸。

5. 同盟の解体

アテーナイではデモティオンが同盟国であるコリントスを占領し、アテーナイの便宜に利用しようと提案し、民会が承認している⁵⁹。しかし、アテーナイが行動に移る前に情報はコリントス側に漏れていた。

コリントス人は領内の要衝に配備されていたアテーナイ人守備隊を手っ取り早く自国兵と交代させ、彼らをコリントスに集結させた。この時にカレスの艦隊がケンクレアイに到着したのである⁶⁰。彼はコリントス側の処置を知り、自分はコリントスに対する陰謀が行なわれていると耳にしたので支援に来たのだ、と声明している。コリントス側は彼に感謝

しながらも艦隊の入港を認めようとはせず、退去を命じたのである。コリントスに集められたアテナイ兵も報酬を与えられて退去させられている。

スパルタとアルカディア連合の戦いは続いていた⁶¹。シケリアの僭主ディオニュシオス二世はティモクラテスの指揮下十二隻から成る艦隊をスパルタに派遣したのである⁶²。ディオニュシオスからの援軍はスパルタ軍に協力してセッラシアを攻撃し、これを占領するのに成功している。アテナイはアルカディアに騎兵部隊を提供する義務を負っていたが、同盟国のスパルタを対象とする戦闘には参加させなかった⁶³。この後、ディオニュシオスの援軍はシケリアへ帰っていった⁶⁴。

コリントスは防衛のために歩兵と騎兵とから成る傭兵隊を雇い、防衛体制を整えると同時に、テーバイに和平の可能性を打診している⁶⁵。テーバイは和平が可能であると答え、コリントスに使節を派遣するよう命じたのである⁶⁶。それに対してコリントスはテーバイとの和平については同盟諸国と協議したいと許可を求めている⁶⁷。テーバイはそれに対して許可を与えた。

コリントスはスパルタに使節を派遣し、自らの窮状を訴え、スパルタも和平に応じるよう提案を持ちかけ、もしスパルタが戦争の継続を望むのであればコリントスの単独講和を認めるよう求めたのである。スパルタは自らが和平に参加するのを拒否したが、コリントスの単独講和を認め、他の同盟諸国に対しても平和を欲するものには同盟からの脱退を認めている⁶⁸。しかしスパルタはメッセニアを回復するまで戦争を継続すると宣言したのである。

コリントスやプレイウス、その他の同盟諸国（恐らくアカイアを除く）はテーバイに和平を求める使節を派遣した。テーバイは同盟条約の締結を要求したが、コリントスは、同盟条約は平和をもたらさない、必要なのは平和条約であると返答してテーバイの要求を拒否したのである。テーバイはそれ以上無理強いをせず、これら諸国の主張を認め、平和条約を結んだのである。テーバイの同盟諸国もこれらの国々と平和条約を締結している⁶⁹。スパルタとの同盟を堅持したのはアカイアの諸都市だけとなってしまった。

このようにして、前六世紀中頃に成立したペロポネソス同盟はスパルタのギリシア政策の基盤としておよそ二百年の間大きな役割を演じた後、前三六六年夏に解体してしまった。そしてスパルタの支配も。

七 外交と党派の分析

レウクトラはこれまで潜在していたギリシア本土の諸都市の矛盾を一挙に表面化させ、事態の流動化を加速させてしまった⁷⁰。これまでスパルタの強い軍事力と政治的影響力のもとに辛うじて維持されて来た政治的均衡が失われてしまった。スパルタの同盟諸国の間

では国外に亡命せざるをえなかった民主派が息を吹き返し、アルゴスなどの支援を受けて帰国と政権奪取に向けて動き始めていた⁷¹。カドメイアの解放とスポドリアス事件に端を発してポイオーティア戦争に加わっていたアテーナイではテーバイに対する不満と不信、スパルタとの戦争に対する厭戦気分が高まり、現状維持を求めるようになっていた。それと同時に第二次アテーナイ海上同盟の結成はアテーナイ人の間に帝国への願望を再び生み出していた⁷²。ペルシアはギリシア本土での安定を強く求めていた。ペルシアとすればレウクトラ以降のギリシア諸都市の動きを注意深く観察しながらも、有力なギリシア都市との提携によってコイネー＝エイレーネーをペルシア王が命じるという在来の手法で対応しようとしていたのである。

決定的な打撃を被ったスパルタはくすぶり続けるアゲーシラーオスへの不満を抑えつつ、これまでギリシア人の間に培って来た政治的遺産を最大限活用して崩れ行く帝国の維持を模索していた。鍵となるのは同盟諸都市内の親スパルタ派、コイネー＝エイレーネーのパートナーであったペルシア、スパルタとの戦争に厭きるようになっていたアテーナイとの連携であった。

1. スパルタ

オリガントロピア

帝国期のスパルタが抱えていた最大の問題はオリガントロピアと呼ばれるスパルタ市民人口の過小さであった⁷³。市民人口の過少さはクセノポンやイソクラテスなどの同時代人も強く印象づけられていたようである。クセノポンは市民人口の過少さを指摘し、イソクラテスはその市民人口が二千名にも満たないと言っている⁷⁴。

確かに前四七九年のプラタイアの戦いにスパルタが戦場に投入した戦力に比較してレウクトラに投入したスパルタの戦力の少なさは印象的である。摂政パウサニアスの指揮下に置かれたスパルタ市民兵は五千名、同数のペリオイコイら非市民兵を含めてラケダイモン重装歩兵隊合計一万名⁷⁵、これにヘイロタイから編成される軽装歩兵三万五千名が加わった。それに対して前三七一年のレウクトラの戦いではクレオンプロトスの指揮下に置かれたラケダイモン部隊の総数は二千二百四十名でしかなかった⁷⁶。

プラタイアの数字は高すぎる嫌いがあるが⁷⁷、ペロポネソス戦争中の前四一八年にマンティネイアの戦場に投入されたラケダイモン部隊四千百八十四名⁷⁸、前三九四年のネメアの戦いに投入された六千名⁷⁹と比較しても前三七一年の戦力の減少は印象的である。

スパルタ本国に残された部隊を含めてスパルタはレウクトラ直前の時点で三千三百六十名の戦力しか保有していなかったのである。ラケダイモンの重装歩兵隊はスパルタ市民兵とペリオイコイら非市民兵から構成されていた。しかし、レウクトラではその比率は一对

二以下に低下してしまっている。その背景には深刻な市民人口の減少という問題が横たわっていた。

カートレッジの推定によれば、前四八〇年には市民数が八千名であったものが、前四一八年までに約三千五百人に減少し、前三九四年に二千五百名前後、前三七一年にせいぜい千五百人にまで減少していた⁸⁰。

クレオンプロトスがポーキスから率いたラケダイモン部隊は四個モラー、二千二百四十名であった。その内スパルタ市民兵は七百名でしかなく、三百名がヒッペイスとしてモラーに配属されているスパルタ市民兵から抽出されているので、二千二百四十名に占めるスパルタ市民兵の数は僅かに四百名でしかなかった。レウクトラで約千名のラケダイモン兵が戦死し⁸¹、スパルタ市民兵の戦死者は四百名に上ったとされる⁸²。

一個モラーは十六個エノーモーティアから編成されている。一個エノーモーティアは三十五名の兵員から編成される戦術単位であった。それが横列三列、縦列十二列を構成する。従って一個モラーは五百六十名の編成規模を持つ。四個モラーでは二千二百四十名ということになる⁸³。

このラコニア部隊に占めるスパルタ市民兵の数はおよそ七百名であったとクセノポンは伝える⁸⁴。それにヒッペイスと呼ばれるエリート集団三百名がクレオンプロトスの親衛兵団を構成していた。七百名に三百名を足すのか、七百名の中に三百名を含めるのかは意見の分かれるところである。因みにカートレッジは七百名がレウクトラに現われたスパルタ市民兵の総数と見なしている⁸⁵。スパルタ本国に残されていたモラーは二個である。各モラーに占めるスパルタ市民兵の数は同数と推定すると、スパルタ本国に残されていた二個モラー中に占めるスパルタ市民兵の数は三百五十名。ラケダイモン全軍三千四百五十六名中スパルタ市民兵は千五十名でしかない計算となる。これに軍務に就いていない要職者や六十五才以上の兵役免除者を含めてもカートレッジの推計によればスパルタ市民の数は千五百名に満たなかったのである。

レウクトラでの戦死者の数はクセノポン⁸⁶に従い千名。そのうちスパルタ市民の戦死者はクレオンプロトス王⁸⁷とポレマルコス一名⁸⁸を含めておよそ四百名に達したとする。これは市民の総数が千五百名を超えないとされる⁸⁹スパルタにとって甘受しがたい損失であったと考えられる。ペロポネソスに進出して来たポイオーティア軍指揮官にアルカディア人たちは防衛の任につくスパルタ市民兵の数の少なさ、兵力不足を指摘している⁹⁰。ディオドロスはエパメイノンダスの第一次ペロポネソス侵攻を前にしてスパルタが防衛の任につくべき「市民兵の減少 eis oligous politikous stratiotas」に直面して「大変な困難に eis pollen amechanian」陥っていたと評している⁹¹。それだけではなく同盟諸国の中には同盟から「脱退 apestekoton」した国もあり、残された同盟諸国も「兵員不足に陥ってい

た oligandrounton」のである⁹²。

しかし、コークウェルはスパルタ完全市民の減少はスパルタの軍事的劣勢には直結しないと論じる⁹³。前四二四年以降、スパルタは市民人口の減少に対応して、ヒュポメイオネスと呼ばれる劣格市民を正規部隊に編入し、ペリオイコイを第一線に投入するとともに、ヘイロタイから解放されたネオダモデイス（ブラシデイオイを含む）、スパルタ市民の子弟と共にアゴーゲーを受けて育てられるモタケス、外国人子弟でスパルタにおいて正規の教育を受けたトロピモイをも動員することで柔軟に対応して来たとする。レウクトラの敗戦をもたらしたのは市民人口の減少でなければ、市民の道徳的退廃でもなく、スパルタ以外のポリスにおいて市民兵の専門的教練が浸透し、重装歩兵としての卓越した能力が最早スパルタの独占でなくなってしまったことにあると結論する。

フックスは市民人口が減少したという証拠は全くなく、減少したのは人口ではなくホモイオイの数であり、オリガントロピアは特権市民のオリガントロピアであったと論ずる⁹⁴。貧困の故に転落していった市民が所属する唯一の身分はヒュポメイオネスであり、前三世紀中頃には千八百～二千三百名ものヒュポメイオネスがいたと推定する。

確かにホモイオイと呼ばれる市民身分の減少はヒュポメイオネスやペリオイコイなどの正規部隊への編入によって補完されたとしても、総体としてのラケダイモン部隊の減少は明白である。前四一八年のマンティネイアの戦いに現れたのは四千百八十四名⁹⁵、前三七一年のレウクトラの戦いに臨んだのは二千二百四十名でしかなかった⁹⁶。レウクトラでの戦死者はその子弟や男子相続者がいない場合にはヒュポメイオネスなどが土地財産を継承することによって補充され得るものではある。しかし同盟諸国の相次ぐ離反による同盟軍の減少は避け難い。かつて支流を集めて大河のようになると形容された⁹⁷同盟軍は小さな流れに姿を変えていた。

ペリオイコイとヘイロタイの動向

前三七〇年暮れ⁹⁸、エパメイノンダス率いるボイオーティア軍がアルカディア連合軍やエーリス軍などと共にラコニアに侵攻したときスパルタが抱えている矛盾が一挙に露呈されることとなった。

スパルタは住民の大多数を占めるラコニアのペリオイコイやヘイロタイの忠誠を確保できていなかった。ペリオイコイの一部はボイオーティア軍のラコニア侵攻を積極的に求め、反乱を起こすだけでなく、ペリオイコイ全体がスパルタには協力しないと語っている⁹⁹。ラコニアに侵攻したボイオーティア軍に協力してヘロスやギュテイオン攻撃に加わった者もいたとクセノポンは伝える¹⁰⁰。プルタルコスにはエパメイノンダスがスパルタの町を攻撃したとき、町の防衛に動員されていたペリオイコイやヘイロタイの多くが脱走し攻撃軍に

加わったと言う¹⁰¹。真偽のほどは別として、クセノポンはエパメイノンダスの最初のラコニア侵攻の折りにペリオイコイの多くが、そしてヘイロタイ全てが反乱を起こしたと述べている¹⁰²。

スパルタの支配に対して長い反抗の歴史を誇るメッセニアのヘイロタイたちはエパメイノンダスのボイオーティア軍の協力を得て独立を回復し、メッセネ市を建設したのである¹⁰³。メッセニアの独立はスパルタの外交関心を縛り、メッセニアの回復に外交努力の全てが注がれ、全ギリシヤ的な外交を展開する余裕をスパルタから奪うことになった。そのことがスパルタの利害と同盟諸国の利害とを懸隔させてしまったのである。

この点においてもコークウェルは懐疑的である。前四六五年以降ヘイロタイは反乱を全く起こしておらず、前三六九年以降も実際反乱を起こしていないと言う¹⁰⁴。ペロポネソス戦争中にアテナイ軍がピュロスを占領したときとテーバイ軍がラコニアに侵攻したときに起きたのはヘイロタイの反乱ではなくて、脱走であった。その理由としてスパルタがヘイロタイを含めて社会的劣格者に地位上昇の幻想を与えていたからである。ヘイロタイが望んでいたのはスパルタの制度からの解放ではなく、スパルタの制度の中での自由であった¹⁰⁵。

コークウェルはヘイロタイがスパルタに対して全く忠実だったと評価している¹⁰⁶。これは前四六五年以降反乱が全く起きていないこと、エパメイノンダスのラコニア侵攻の折りも逃亡はあっても反乱はなかったことが根拠となっている。しかし反乱を起こさなかったことが忠実だったことの証なのだろうか。

プルタルコスはいわゆるリュクルゴスの制度の下で悪名高いクリュプティアを含めてヘイロタイが様々な抑圧を受けていたことを伝えている¹⁰⁷。その為ヘイロタイは政治的にも経済的にも支配されていただけでなく、心理的にも支配されていたのである。テーバイ人がラコニアに侵攻したときに捕らえたヘイロタイにテルパンドロスやアルクマンなどを歌うように命じたときに、主人が望まないと言って断ったという逸話が残されている¹⁰⁸。

これはヘイロタイが心のレベルにおいてスパルタ市民に完全に支配されていたことを物語っている。一種のクライアント症候群に陥っていたことを指し示しているのだろう。従って、ヘイロタイがスパルタへの忠誠心から反乱を起こさなかったのではなく、長年にわたる抑圧の体験からスパルタに精神的に従属したままで反乱を起こせなかったと言った方が適切であろう。

それにヘイロタイが反乱を起こさなかったとしても、スパルタ市民の側がヘイロタイに対して危惧の念を抱いていたことは明らかである。クセノポンは六千人以上のヘイロタイがスパルタ防衛に志願したとき、その数のあまりもの多さに恐怖感を抱いたことを伝えている¹⁰⁹。スパルタというポリスがヘイロタイの反乱という活火山の上に常に位置していた

というのは誇張であるとしても、ペリオイコイやヘイロタイなどの従属民の地位向上の機会を設けることによって彼らの不満を吸収し、スパルタへの忠誠心を醸成していたというコークウェルの説は認めがたい¹¹⁰。

スパルタというポリスは支配するスパルタ市民も支配されるペリオイコイやヘイロタイなどの従属民も互いに恐れを抱きながら、一方が他方を完全に支配してしまっており、後者を精神的にも心理的にも完全に統制した状態に置かれていたのである。反乱の有る無しは忠誠心の試金石にはならない。

スパルタ市民団の危機

スパルタが抱えていた危機はそれだけに留まらなかった。市民団の分裂という危機をはらんでいたのである。

レウクトラの戦いを生き延びた市民兵とその家族に科せられる不名誉な処遇は戦後のスパルタ社会に新たな争乱の要因を生み出す可能性を秘めていた。コークウェルは敗れた戦いで戦死しなかったことは不名誉と見なされたと指摘する¹¹¹。スパルタでは敗れた戦いに生き残ることが敵前逃亡と同等と見なされたのである。何故なら不名誉の対象とされる生存者三百名は大きな数字である。この人々を法律が定めるように処罰すれば、彼らがスパルタ内外の敵と手を組んで暴動を起こす危険性があった。そこでアゲーシラーオスは法律を一日だけ眠らせることにしたのである。そうすることでアゲーシラーオスは国家にとって深刻な危機を当面回避することができたのである。しかし更なる危機がスパルタ市民団の間で進行していた。

エパメイノンダスが率いる侵攻軍がスパルタの町そのものに圧力を加えたとき二百名ばかりの不穏分子がイッソリオンと呼ばれる要害の地を占拠して反乱を起こそうとした¹¹²。このときイッソリオンを占拠した人々とこれを鎮圧しようとする人々との間に内乱が起きる危険性があったのをアゲーシラーオスの機転で回避できたのである。そして十五名ばかりを捕らえて夜の間に処刑してしまったのである¹¹³。

ブルタルコスは「古くて中身の膿んだ直り切らない傷のような厄介な輩 ton palai tines hypoulon kai poneron」と占拠を試みた人々を形容している。この形容が住民のどのような人々を具体的に指しているのかは良く分からない。同じ事件を記述しているネポスは占拠を企てた人々を「青年 adulescentuli」と呼び¹¹⁴、ポリュアイノスも「若者 neaniai」と呼んでいる¹¹⁵。ポリュアイノスはこの若者たちを「ラコニア人 Lakones」とも呼んでいる。デーヴィッドはもう一つの事件の当事者が「スパルタ市民 andres Spartiatai」と呼ばれていることに注目して、イッソリオンを占拠した人々は少なくとも大部分はヒュポメイオネスと呼ばれる劣格市民だったと推測している¹¹⁶。シプリーは palai hypouloi（中に

膿を持った古傷) という医学的な比喩と *poneroi* (悪人) という政治的な比喩が用いられていることからヒュポメイオネスや零落したスパルタ市民を包含していると論じている¹¹⁷。

これとは別に革命を企てる陰謀が画策されていた¹¹⁸。こちらの方はより深刻であったが、密告によって未然に潰している。革命を企てたのはスパルタ市民身分に属する人々であった。デーヴィッドは *andres Spartiatai* を特権的な完全市民権を持つホモイオイとし¹¹⁹、シプリーはトレサンテスを含め、かつてのクレオンプロトスの支持者や市民権喪失の危機にあった貧困スパルタ市民と考えている¹²⁰。しかし史料の目的は困難な状況の中で如何にアゲーシラーオスが見事にことを処理したのかに置かれており、革命そのものについて詳細を明らかにすることではなかった。その為に動機と目的がはっきりとしないのである。デーヴィッドはアーギス四世とクレオメネス三世の改革に連なる先駆と評価している¹²¹。

アゲーシラーオスとアーギス家の諸王

スパルタが体制として二王制を維持する限り、アーギス家とエウリュポソス家という二つの王家が、より厳密には二人の王がスパルタにおける政治指導権を巡って対立し合うのは当然の帰結であった。王の回りには数多くの友人や知人、伝統的な支持者が蝟集しており、それぞれが強力な党派を形成していた。王はエポロス職やナウアルコス職とは違い再任不可の一年任期の役職ではなく、スパルタにおいて恒常的に強い影響力を及ぼすことが出来たのである。それ故、アーギス家の王とエウリュポソス家の王は自己の名声と仲間の利益の為にそれぞれが党派を率いて対抗し牽制し合ってきたのである¹²²。

アーギス家ではパウサニ阿斯、次いでその二人の子供たち、即ちアゲーシポリスとクレオンプロトスがエウリュポソス家のアゲーシラーオスと対立した。前三七〇年代のスパルタはクレオンプロトス派とアゲーシラーオス派、およびその中間派に分かれて対立していた¹²³。クレオンプロトスとその側近集団がレウクトラで消滅してしまったことはアゲーシラーオスに対抗するアーギス家の意志と力を殺いでしまったようである。

ブルタルコスによるとクレオンプロトスの跡を継いだのは息子のアゲーシポリス二世であったが、翌前三七〇年には亡くなっている¹²⁴。その跡を兄弟のクレオメネス二世が継承している。しかしクレオメネス二世は前三〇九／八年まで六十一年間もスパルタ王の地位にあったということを除いてその業績は全く伝えられていない¹²⁵。アゲーシポリス二世もクレオメネス二世もその父と違って独自の政策を展開したと伝えられていないのは即位した時の年齢が若すぎたということ、レウクトラにおいて有能で経験を積んだ有力な支持者を失ってしまったためにアーギス家の王が強力な党派を形成できなかったということ、或いはエウリュポソス家の王に対抗しようという気力を欠いていたことなどが考えられる。レウクトラの後、スパルタではアゲーシラーオスに公然と反対する動きはなかったようであ

る¹²⁶。

アゲーシラーオスとアンタルキダス

この時期、スパルタではこれまでの党派間の対立が温存されながら、対立の表面化・深刻化は抑制されていた。それにもかかわらず史料は党派同士の対立が解消されず、底流に流れていたことを伝えている。

一つはアンタルキダスに対する誹謗中傷の噂である。ボイオーティア軍がラコニアに侵攻したときエポロスであったアンタルキダスが恐怖感から息子たちを南のキュテラ島に避難させたという噂がプルタルコスによって伝えられている¹²⁷。これが噂にすぎないと断定するのは *phasin* という動詞が使われているからである。噂が真実か否かは不明であるが、アンタルキダスがエポロスであったとすると彼がスパルタ市民によって企てられた革命の陰謀を秘密裏に処理する為にエポロスの一人としてアゲーシラーオスと協議した可能性は非常に高い。

シプリーはアンタルキダスがキュテラ島の返還と住民の再入植に関わっていたと考えている¹²⁸。キロン以来、キュテラ島はスパルタ防衛の弱点となっており、その防衛ないしは確保にアンタルキダスが関係していたのだろう。そのアンタルキダスの努力を矮小化する噂を流したのはアンタルキダスと対立していたアゲーシラーオスの周辺であったのだろう¹²⁹。更にはアンタルキダスがペルシアとの交渉の不首尾の結果自殺したという噂¹³⁰もスパルタの指導者間で厳しい論争が戦わされていたことに根差しているのだろう。

しかしアンタルキダスはスパルタにとって貴重な外交カードを保持していた。それはペルシア・カードであった。ペルシア王アルタクセルクセスとは深い信頼関係にあり、プリュギア総督のアリオバルザネスとは *xenia* の関係にあったと言われる¹³¹。前三六九／八年アリオバルザネスの許からピリスコスが派遣され、平和会議を招集しスパルタに有利な裁定を下している。さらにボイオーティアとの交渉が不首尾に終わると傭兵を雇用する資金をスパルタに提供している。そしてそのアリオバルザネスとスパルタは同盟を結んでいるが、この政策を推進したのはアンタルキダスだったとカートレッジは推測している¹³²。スパルタがペルシア王やペルシア人総督の外交的後押しと資金援助を必要とする限り、アンタルキダスはスパルタの外交に大きな影響を及ぼし続けることができたのである。

今一つはスパルタ国内でのアゲーシラーオスに対する不満の存在である¹³³。レウクトラの敗報が伝えられたとき、スパルタでは多くの人が神託を歪曲して不適格者のアゲーシラーオスを王に戴いたためにこのような事態を招いたのだと批判したし、メッセニアを失ったときもアゲーシラーオスの所為で祖先以来の地を失ってしまったのだという声がスパルタ人の間で根強く囁かれたのである。アゲーシラーオスの政敵と伝えられる¹³⁴ アンタ

ルキダスがアゲーシラーオスに語ったと言われている言葉はテーバイに対して頑なな政策に固執するアゲーシラーオスに対する皮肉ではあった¹³⁵が、世論はその皮肉と相通じるところがある。ただその不満がアゲーシラーオスの政策を転換させる力を持っていなかっただけである¹³⁶。

前三七〇年の使節団の性格

レウクトラ後のスパルタを誰が指導したのかを明らかにすることは大事である。エパメイノンダス率いるボイオーティア軍のラコニア侵攻という困難な時期にスパルタからアテーナイに派遣された使節の顔ぶれを検討することは重要だと思われる。クセノポンはアラコス、オキュロス、パラクス、エテュモクレス、オロンテウスの五名の人物を挙げている¹³⁷。アラコスは前四一〇年にエポロス職を¹³⁸、前四〇六年には名目のみのナウアルコス職を務めた人物で¹³⁹、前三九八年には小アジアのデルキュリダスのもとに視察の為に派遣されており¹⁴⁰、政治経歴の長い人物である。オキュロスは前三七八年にスポドリアス事件が生じたときにアテーナイに派遣されていた使節の一人だった¹⁴¹。パラクスは前三九七年のナウアルコスで、デルキュリダスの小アジア遠征に協力している¹⁴²。彼はまたボイオーティア人のプロクセノスでもあり、前三九〇年にはボイオーティア人使節団の仲介の労をとってアゲーシラーオスに引き合わせようとしている¹⁴³。エテュモクレスは前三七八年にスポドリアス事件が生じたときにオキュロスとともに使節の一人としてアテーナイに派遣されていた人物である¹⁴⁴。オロンテウスについてはこの箇所以外には知られていない人物である。彼らがどの党派に所属する人々であったか史料は直接語っていないのははっきりしないが、アゲーシラーオスの周辺に位置する人物であった可能性がある。

アラコスとパラクスの両名はペロポネソス戦争期からアビュドスを拠点に小アジアで活躍したデルキュリダスと深く関わりを持っていた。そのデルキュリダスは前三九九年から三九六年にかけて小アジアに遠征してペルシア軍と戦っている¹⁴⁵。さらにデルキュリダスは前三九六年にペルシアとの間の講和条約を締結するとスパルタに帰国し¹⁴⁶、アゲーシラーオスがアジアからヨーロッパに引き上げてくる最中ネメアで戦っている¹⁴⁷。その勝利をアゲーシラーオスに伝える任を与えられ、さらにその勝利をアジアの諸都市に伝えるようアゲーシラーオスによってヘレスポントスに派遣された人物である¹⁴⁸。機略の才があり、シシュポスという渾名を持っていたと伝えるクセノポンはこの人物に好意的である¹⁴⁹。これらの事実から判断するとデルキュリダスはアゲーシラーオスに好意的な人物であり¹⁵⁰、そのデルキュリダスと重要局面で共同したアラコスとパラクスはやはりアゲーシラーオスに近い人々であったと判断される。

プルタルコスによるとエテュモクレスはアゲーシラーオスの友人の一人であった¹⁵¹。エ

テュモクレスの同僚としてスポドリラス事件のときアテナイに使節として派遣されていたオキュロス¹⁵²もアゲーシラーオスの仲間であった可能性は高いと言わざるを得ない。

以上を総合すると前三七〇年暮れに同盟諸国の人々と共にアテナイに派遣された五名のスパルタ人使節はアゲーシラーオス派の人々であったと判断され、アテナイの援助を求める任務を当てられたのである。これはアテナイとの連携がアゲーシラーオスの国家防衛の重要な一翼を占めていたことを物語っている。

アゲーシラーオス

レウクトラの後の困難な時期、仲間のスパルタ市民や同盟国の人々の不満と批判を受けながらもスパルタの防衛と外交を指導したのは年老いたアゲーシラーオスであった。未曾有の危機に直面したスパルタはアゲーシラーオスの経験と意志、指導力に頼らざるを得なかった。

レウクトラから撤収して来る部隊の収容に向かったのはアゲーシラーオスの息子アルキダーモスであった¹⁵³。アゲーシラーオスは病から回復すると、積極的にスパルタの外交に関与するようになる。そのとき彼はマンティネイアの市壁再建を阻止すべくアルカディアに派遣されている¹⁵⁴。アルカディアでの不穏な動きを抑止するためにスパルタ軍部隊を率いて進攻している¹⁵⁵。このときアゲーシラーオスはスパルタに亡命してきたテゲアの親スパルタ派の人々を干渉によって権力の座に復帰させようとしたのである¹⁵⁶。ボイオーティア軍やアルカディア軍、アルゴス軍やエーリス軍がラコニアに侵攻し、スパルタがその建国以来最大の危機に曝されたとき防衛の指揮をとったのもアゲーシラーオスであった¹⁵⁷。アルカディア連合やボイオーティアを中心とする反スパルタ連合の圧力に抗してスパルタの存続と体制の堅持を果たしたことはアゲーシラーオスの功績であろう¹⁵⁸。前三六八年のアルキダーモスのアルカディア遠征はいわゆる泣かない戦争の勝利を結果したが、これはアゲーシラーオスの息子が挙げた勝利であった¹⁵⁹。

レウクトラでの敗戦によって名声と自信、兵員に大きな打撃を被っていたスパルタにとって残された同盟諸国の確保とともにテーバイの強大化に警戒心と反感を強めていたアテナイとの連携を強固なものにしておくことが枢要であった。これらは何れもアゲーシラーオスがこれまで築いて来たチャンネルを介して達成されたのである。

事実アテナイの存在がスパルタへの圧力を軽減していたし、民主派に対する寡頭派の敵対心がコリントスやプレイウスなどの同盟諸国をスパルタにつなぎ止めていたし、エーリスとアルカディア連合との反スパルタ連合の分裂がスパルタの存続を容易にしたのである。

しかし、個人的な友情関係を重視するアゲーシラーオスの外交手法はアリオバルザネス

やマウソロス、タコスのような人物に関わる場合、スパルタの外交的立場を危うくする可能性を秘めていた。前三六六年のペルシアでの外交が不調に終わった年に、スパルタはペルシア王に対して叛旗を翻していたアリオバルザネスの許にアゲーシラーオスを派遣しその苦境を救ったと伝えられている¹⁶⁰。このようなアゲーシラーオスの海外での活動はスパルタがメッセニア回復の為に必要としていた傭兵雇用の為の資金を調達するのには貢献しているが、ペルシアを敵対陣営に向かわせる危険性があった。

危機に際してのアゲーシラーオスの手腕を評価しながらも、その危機を招いた張本人としてスパルタ市内ではアゲーシラーオスに対する不満が高まっていた¹⁶¹。とりわけメッセニアの喪失はアゲーシラーオスの責任であると感じられていたのである。プルタルコスにはアゲーシラーオスがメッセニアの独立を認める講和条約案にことごとく反対したと伝えている。メッセニア奪回に固執するアゲーシラーオスの頑なな外交政策がスパルタをギリシア世界全体の中心から引きずりおろしてしまい、ペロポネソスの一地方にその関心と活動を閉じ込めてしまうこととなってしまった¹⁶²。

注

- 1 Xen. *Hell.* 7. 1. 43.
- 2 Xen. *Hell.* 7. 1. 43.
- 3 Xen. *Hell.* 7. 1. 43.
- 4 A. Griffin, *Sikyron*, Oxford, 1982, 68.
- 5 Xen. *Hell.* 7. 1. 44. エウプロンのクーデタについては Griffin, 68-71を参照のこと。
- 6 Xen. *Hell.* 7. 1. 55.
- 7 D. S. 15. 70. 3; Xen. *Hell.* 7. 1. 46.
- 8 Plut. *Pelop.* 30; Xen. *Hell.* 7. 1. 35. グリフィンにはシキオンにおけるこの政変を寡頭派の中の親スパルタ派と親テーバイ派の争いであったと解釈している。Griffin, 72.
- 9 Xen. *Hell.* 7. 1. 34-35.
- 10 Xen. *Hell.* 7. 1. 35; Plut. *Pelop.* 30; *Artax.* 22; Dem. Or. 19. 137.
- 11 Plut. *Artax.* 22.
- 12 Xen. *Hell.* 7. 1. 33.
- 13 Xen. *Hell.* 7. 1. 36; Plut. *Pelop.* 30. このときのスパルタの使節はアンタルキダスではなく、エウテュクレスであったことに注意する必要がある。エウテュクレスはこれ以降前三三三年頃に至るまでペルシアとの外交交渉を担当する。D. J. Mosley, "Euthycles: one or two Spartan Envoys?", *C. R.* 22, 1972, 167-169; id. "spartanische Diplomatie", in E. Olshausen (ed.), *Antike Diplomatie*, Darmstadt, 1979, 191.
- 14 Xen. *Hell.* 7. 1. 36. cf. 38. Plut. *Pelop.* 30.
- 15 Xen. *Hell.* 7. 1. 38; Plut. *Pelop.* 30. 6-7; *Artax.* 22. 6; Dem. Or. 19. 137.
- 16 Xen. *Hell.* 7. 1. 38.
- 17 Xen. *Hell.* 7. 1. 40.
- 18 Xen. *Hell.* 7. 1. 41; D. S. 15. 72. 3. クロノロジーの問題については Griffin, 71の指摘を参照。
- 19 Xen. *Hell.* 7. 2. 1.
- 20 Xen. *Hell.* 7. 4. 11.
- 21 Xen. *Hell.* 7. 2. 1, 20.
- 22 Xen. *Hell.* 7. 2. 18-19.
- 23 Xen. *Hell.* 7. 2. 17.

- 24 Xen. *Hell.* 7. 2. 1, 17.
 25 Xen. *Hell.* 7. 2. 11.
 26 クセノポンはシキュオン人部隊 hoi Sikyonioi と傭兵部隊 hoi misthophoroi を区別している。
 27 Xen. *Hell.* 7. 2. 11-12.
 28 Xen. *Hell.* 7. 2. 13.
 29 Xen. *Hell.* 7. 2. 14.
 30 Xen. *Hell.* 7. 2. 15.
 31 Xen. *Hell.* 7. 2. 16.
 32 Xen. *Hell.* 7. 2. 18.
 33 Xen. *Hell.* 7. 2. 19; D. S. 15. 75. 3.
 34 Xen. *Hell.* 7. 2. 20: テュアミアの要塞は構築中であった。
 35 これはコリントスとプレイウスの交通線開鑿を目的としていると思われる。
 36 Xen. *Hell.* 7. 2. 21-22.
 37 Xen. *Hell.* 7. 2. 23.
 38 Xen. *Hell.* 7. 3. 1.
 39 Xen. *Hell.* 7. 3. 2.
 40 Xen. *Hell.* 7. 3. 4.
 41 Xen. *Hell.* 7. 3. 9.
 42 Xen. *Hell.* 7. 3. 4.
 43 Xen. *Hell.* 7. 4. 1; D. S. 15. 76. 1; Dem. Or. 18. 99; Aesch. Or. 3. 35.
 44 Xen. *Hell.* 7. 4. 2.
 45 彼はアテーナイへの接近の機会を窺っていた。彼の狙いはテーバイとアテーナイの対立を利用してテーバイの影響から独立すること、それにスパルタに対するアテーナイの支援を抑制することであったと考えられる。
 46 Xen. *Hell.* 7. 4. 3.
 47 Nepos, *Epam.* 6. 1-3; Plut. *Apoph. Epam.* 15.
 48 Xen. *Hell.* 7. 3. 4.
 49 Xen. *Hell.* 7. 3. 5.
 50 Xen. *Hell.* 7. 3. 6.
 51 Xen. *Hell.* 7. 3. 7.
 52 Xen. *Hell.* 7. 3. 8.
 53 Xen. *Hell.* 7. 3. 9.
 54 Xen. *Hell.* 7. 3. 10.
 55 Xen. *Hell.* 7. 3. 11.
 56 Xen. *Hell.* 7. 3. 12.
 57 Griffin, 75. エウプロンの暗殺後、シキュオンで政権を掌握したのはエウプロンの子アデアスを指導者とする民主派であり、アデアスの後はエウプロン二世が父の地位を継承している。
 58 Xen. *Hell.* 7. 4. 1.
 59 Xen. *Hell.* 7. 4. 4.
 60 Xen. *Hell.* 7. 4. 5.
 61 Xen. *Hell.* 7. 4. 6.
 62 Xen. *Hell.* 7. 4. 12.
 63 Xen. *Hell.* 7. 4. 6.
 64 Xen. *Hell.* 7. 4. 12.
 65 Xen. *Hell.* 7. 4. 6.
 66 Xen. *Hell.* 7. 4. 7.
 67 Xen. *Hell.* 7. 4. 8.
 68 Xen. *Hell.* 7. 4. 9. この年アゲーシラーオスはアリオバルザネスの許に派遣されていたと考えられている。P. Cartledge, *Agesilaos and the Crisis of Sparta*. Baltimore, 1987, 325-326.

- 69 Xen. *Hell.* 7. 4. 11: クセノポンはアルゴスの名前しか挙げていないが、シキュオンやアルカディアなどもこれらの諸国との講和に名を連ねていたであろうと考えられる。
- 70 E. g. J. Roy, "Thebes in the 360s B. C.", *CAH.* VI. 1994. 187f.
- 71 Roy, 189-190.
- 72 C. J. Tuplin, *The Failings of Empire: A Reading of Xenophon Hellenica* 2. 3. 11-7. 5. 27, *Historia Einzelschriften* 76, Stuttgart, 1993, 107.
- 73 オリガントロピアの問題についてはアリストテレスとプルタルコスが依拠したピュラルコスが主要な史料となる。アリストテレスはスパルタが *apoleto dia ten oliganthropian* と指摘する (1270a 34)。その理由として土地財産が少数の人間の掌中に集積された為に多くの市民が貧困となり (Arist. *Pol.* 1270b 5-6; 30-32), *horos tes politeias* である共同会食に分担金を払えなくなって市民権を失ってしまったと説明する (1271a 26-36)。ピュラルコスはエピタデウスの法が富裕者の欲望を解き放ち、少数の人間の手の中に土地と富を集中させることになり、ホモイオイと呼ばれる完全市民の減少につながったと説明する (Plut. *Agis.*, 5. 2; 5)。少数の者に土地財産が集中した理由としてクロワは娘たちに相続権があり *patrouchos* と呼ばれる家付き娘に近親者との結婚の義務がなかったことを掲げている。G. E. M. de Ste. Croix, *The Class Struggle in the ancient Greek World*, London, 1981, 102。市民人口の減少については G. Busolt, *Griechische Staatskunde*, München, 1926, 718-719。長谷川岳男, 「エピタデウスの法 — 古典期スパルタの再検討 —」, 『駒沢史学』45, 1993, 88は同時代のスパルタ人はオリガントロピアを深刻視していなかったと言う。
- 74 Xen. *Lac. Pol.* 1. 1 (he Sparte oliganthropotaton poleon ousa); Isoc. *Or.* 12. 255(ontas ou pleious tote dischilion).
- 75 Hdt. 9. 28.
- 76 P. Cartledge, *Sparta and Lakonia: a regional History 1300 to 162 BC*. London/New York, 2002, 251.
- 77 Cf. J. Beloch, *Bevölkerung der Griech.-Römischen Welt, Roma*, (1886) 1968, 141; A. Fuks, *Social Conflict in ancient Greece*, Leiden, 1984, 246; E. Meyer, *Geschichte des Altertums* IV-1, Darmstadt, 1981, 384-385.
- 78 Thuc. 5. 68.
- 79 Xen. *Hell.* 4. 2. 16.
- 80 Cartledge, *Sparta*, 264.
- 81 Xen. *Hell.* 6. 4. 15.
- 82 Plut. *Ages.* 28. 8; DS. 15. 55. 5.
- 83 Cartledge, *Sparta*, 251。このカートレッジの計算は正確ではないと思われる。何故なら各エノモーティアの指揮官をこれに加えないと正確に横列三列、縦列十二列の戦列を構成することはできないからである。従って各エノモーティアは三十六名、各モラーは五百七十六名の編成となる。それが四個モラーだから二千三百四名となるからである。
- 84 Xen. *Hell.* 6. 4. 15.
- 85 Cartledge, *Sparta*, 251.
- 86 Xen. *Hell.* 6. 4. 15. cf. D.S. 15. 55. 5.
- 87 Plut. *Ages.* 28. 8; Xen. *Hell.* 15. 55. 5.
- 88 Xen. *Hell.* 6. 4. 14.
- 89 Cartledge, *Sparta*, 251.
- 90 Xen. *Hell.* 6. 5. 23.
- 91 Xen. *Hell.* 15. 63. 1.
- 92 Ibid.
- 93 G. L. Cawkwell, "The Decline of Sparta", in M. Whitby (ed.), *Sparta*, Routledge/New York, 2002, 236-257.
- 94 A. Fuks, *Social Conflict*, 247-248.
- 95 Thuc. 5. 68.
- 96 P. Cartledge, *Sparta and Lakonia: a regional History 1300 to 162 BC*. London/New York, 2002, 251.
- 97 Xen. *Hell.* 4. 2. 11-12: コリントス人ティモラオスの言葉である。

- 98 クセノポンは「冬の真っ只中」であったと記し (Xen. *Hell.* 6. 5. 20), プルタルコスは冬至近くであったと証言している (Plut. *Pelop.* 24)。
- 99 Xen. *Hell.* 6. 5. 25.
- 100 Xen. *Hell.* 6. 5. 32.
- 101 Plut. *Ages.* 32.
- 102 Xen. *Hell.* 7. 2. 2.
- 103 Plut. *Ages.* 34.
- 104 Cawkwell, “Decline”, 244.
- 105 Cawkwell, “Decline”, 246.
- 106 Cawkwell, “Decline”, 245.
- 107 Plut. *Lyc.* 28.
- 108 Plut. *Lyc.* 28.
- 109 Xen. *Hell.* 6. 5. 29.
- 110 P. Oliva, *Sparta and her social Problems*, Amsterdam/Prague, 1971, 47. オリヴェはスパルタ市民とヘイロタイの関係は非常に緊張したものであると指摘している。Thuc. 4. 80; Theop. *FGH.* 115F 13; Xen. *Hell.* 3. 3. 6; Xen. *Lac. Pol.* 12. 4; Kritias, fr.37(Diels) = Liban. *Or.* 25. 63におけるヘイロタイに関わる記述を参照のこと。
- 111 Cawkwell, “Decline”, 253.
- 112 Plut. *Ages.* 32.6. Nepos, *Ages.* 6. 2. Polyain. 2. 1. 14. D. R. Shipley, *A Commentary on Plutarch’s Life of Agesilaos*, Oxford, 1997, 345–46.
- 113 Plut. *Ages.* 32. 8.
- 114 Nepos, *Ages.* 6. 2.
- 115 Polyain. 2. 1. 14.
- 116 E. David, “Revolutionary Agitation in Sparta after Leuctra”, *Athenaeum*, n.s. 58, 1980, 305. id. *Sparta between Empire and Revolution (404–243 B. C.)*, Salem, 1986, 87.
- 117 Shipley, *Commentary*, 345. しかしフッカーは「劣格市民」という身分の存在を否定し、アゴージェは受けて来ているが所領を持っていないのでその獲得を待っている潜在的市民に過ぎないと言う。J. T. Hooker, *The ancient Spartans*, London/Toronto/Melbourne, 1980, 117–118. 古山正人, 「モタケス, トロフィモイ, スパルティアタイのノトイ — スパルタの小社会集団 —」, 『歴史学研究』597, 1989, 18は劣格市民を救済するモタケスは有効に機能しなかったと評している。
- 118 Plut. *Ages.* 32. 10.
- 119 David, “Revolutionary Agitation”, 305.
- 120 Shipley, *Commentary*, 347.
- 121 David, *Sparta*, 88.
- 122 C. D. Hamilton, *Agesilaus and the Failure of Spartan Hegemony*. Ithaca/London, 1991, 42–43.
- 123 Xen. *Hell.* 5. 4. 25.
- 124 Plut. *Agis et Cleom.* 3; D. S. 15. 60. 4; *Der Kleine Pauly*, Bd. 1, 128.
- 125 *Der Kleine Pauly*, Bd. 3, 242; Plut. *Agis*, 3; D. S. 20. 29. 1; Paus. 1. 13. 4; 3. 6. 2; A. H. M. Jones, *Sparta*, Oxford, 1968, 148.
- 126 Hamilton, *Ages.* 43.
- 127 Plut. *Ages.* 32. 1. この箇所のプルタルコスの史料については Shipley, *Commentary*, 343.
- 128 Shipley, *Commentary*, 343.
- 129 David, *Sparta*, 85; 219, n. 29. デーヴィッドはペルシアとの交渉が不首尾に終わりその責任を負ってアントルキダスが自殺を図ったと伝えられる事件と絡んでかかる噂が広まったと解釈している。
- 130 Plut. *Artax.* 22. 4. cf. J. Buckler, “Plutarch and the Fate of Antalkidas”, *GRBS.* 18. 1977. 139–145. バックラーはアントルキダスの自殺を前三六二／一年の平和会議の後に置いている。
- 131 Cartledge, *Ages.* 310.
- 132 Cartledge, *Ages.* 325. このアリオバルザネスとスパルタとの同盟がペルシア王の警戒を招き, 前三六六年の会議においてペルシア王をボイオーティアの主張に傾けさせたという見解があるが, カートレッジはこ

- の段階ではアリオバルザネスは謀反を企ててはおらずペルシア王に忠実であったとしている。Cf. J. Buckler, *The Theban Hegemony 371-362 BC*, Camb./Mass./New York., 1980, 154-155; Roy, 197; Cartledge, *Ages*. 387.
- 133 Plut. *Ages*. 30. 1-2; 34.
- 134 Plut. *Ages*. 23.
- 135 Plut. *Ages*. 26.
- 136 Cf. Hamilton, 212. 古山正人, 「スパルタにおけるパトロネジ論の有効性」, 『古典古代とパトロネジ』, 名古屋大学出版会, 1992, 90はアゲーシラーオスがパトロネジを全面利用して大きな影響を及ぼしたと指摘している。
- 137 Xen. *Hell*. 6. 5. 33.
- 138 Xen. *Hell*. 2. 3. 10.
- 139 Xen. *Hell*. 2. 1. 7.
- 140 Xen. *Hell*. 3. 2. 6.
- 141 Xen. *Hell*. 5. 4. 22.
- 142 Xen. *Hell*. 3. 2. 12; D. J. Mosley, “Pharax and the Spartan Embassy to Athens in 370/69”, *Hist.* 12, 1963, 247-250.
- 143 Xen. *Hell*. 4. 5. 6.
- 144 Xen. *Hell*. 5. 4. 22.
- 145 Xen. *Hell*. 3. 1. 8-2. 20.
- 146 Xen. *Hell*. 3. 2. 20.
- 147 Cf. Xen. *Hell*. 4. 3. 2.
- 148 Xen. *Hell*. 4. 3. 1-2.
- 149 Xen. *Hell*. 3. 1. 8.
- 150 Cartledge, *Ages*. 210, 355: カートレッジはデルキュリダスをアゲーシラーオスの友人で仲間であったと考えている。
- 151 Plut. *Ages*. 25; Cartledge, *Ages*. 375: カートレッジはエテュモクレスをアゲーシラーオスの友人で長老会の議員だったと考えている。
- 152 Cartledge, *Ages*. 157: カートレッジはオキュロスを対アテーナイ関係の専門家と評価しているだけである。
- 153 Xen. *Hell*. 6. 4. 18.
- 154 Xen. *Hell*. 6. 5. 3-5.
- 155 Xen. *Hell*. 6. 5. 10; 15-21.
- 156 G. L. Cawkwell, “Agesilaus and Sparta”, *C. Q.* n.s. 26, 1976, 75; Hamilton, *Ages*. 218.
- 157 Xen. *Ages*. 24; Plut. *Ages*. 31-32.
- 158 Xen. *Ages*. 24.
- 159 Xen. *Hell*. 7. 1. 31-32; Plut. *Ages*. 33.
- 160 Xen. *Ages*. 2. 26.
- 161 Plut. *Ages*. 34.
- 162 Plut. *Ages*. 35.